

ユジノサハリンスクの日本

@Yuzhno-Sakhalinsk



サハリン州郷土博物館。日本統治時代に樺太庁博物館として建てられた 写真提供：筆者

数

年前、8月と10月前半の2度にわたり、サハリンをフィールドトリップで訪れた。サハリンは、稚内から宗谷海峡を隔てて43キロしか離れていない。晴れた日には、稚内の港から、島影が望めた。緯度が高いサハリンの秋は早く、速い。その分、夏は凝縮して集中した。

短い夏の間、大輪の野百合、ルピナス、ハマナスが、島のいたるところで競うように咲き乱れる。

稚内にある北方記念館の説明では、サハリンの近代史は以下のようになる。

18世紀に、南部海岸で松前藩による漁業開発が行なわれていた。一方、ロシア帝国の南下にともない、ロシア系の進出も始まった。19世紀中期に、この島は日本とロシアの共同統治となっていたのだが、1875年、明治政府は千島列島の統治権と交換に、樺太における主権主張を放棄した。のちに日露戦争の勝利で、日本は島の南半分を獲得した。樺太庁は、鉄道を敷設し、鉱山を拓き、パルプ産業と農業を奨励した。そして第二次世界大戦の終結とともに、この島は再びソヴィエト領となった。

多くの場合、植民地経営は、ある意味で宗主国による「近代」の提供であったように、後発帝国であった日本も、樺太に「近代」を提供した。

日本の植民地という同条件下にありながら、朝鮮や台湾のそれに比較すると、南樺太（北緯50度以南）植民にかかわる記

録は、驚くほど少ない。このフィールドトリップの主目的は、島中央部にあるニヴフの集落で、長老たちからその体験をうかがうところにあった。

10月前半に訪れたとき、ユジノサハリンスク（旧名・豊原）からティモフスクに、一晩をかけて汽車で向かった。北上するとともに、カラマツや白樺の葉が黄色や金色に染まり、陽光をきらきらと反射していた。

ティモフスクからユジノサハリンスクに戻れば、もう晩秋だった。この街は、日本の都市計画者たちによって整備された、基盤の目状のまっすぐな通りによって特徴づけられている。豊原神社をはじめとする、日本支配を示す記念碑的建造物は、ソヴィエト・ロシアに主権が移ってから、すっかり取り払われてしまった。

現存する統治期の建造物は、日本支配下では、樺太庁博物館と呼ばれたものだ。近代の公共機能と日本の城郭様式が見事に融合したこの建物は、サハリ州郷土博物館として、現在でも使用されている。折りからの強風が、城を囲む鬱蒼とした森に、枯れ葉を舞わせていた。☺